



埼玉の社叢

入間市三輪神社社叢ふるさとの森

入間市中神字坂上三四五

海原の波紋を思わせるような、一番茶の摘み取りを終えた一面の茶畑の中に、孤島のようにぽっかりと浮かぶ三輪神社の杜がある。

神社の北側を霞川が流れ、その向こう（写真奥）には衝立のように加治丘陵が東西に延びており、集落は丘陵の麓に沿って分布する。

この丘陵の斜面には、九世紀前後に操業されていた古代の窯跡が多数分布しており（東金子窯跡群）、日用の須恵器のほか、九世紀中頃には、武蔵国分寺七重塔再建の瓦が焼かれたことがわかっている。

縁起によると、往昔、当地で幾百歳という老翁老婆が常に琵琶を弾いていた。里人はこれを敬って国津神と呼び、この翁のいるところを「中神村」、または「比和野」と称した。承平六年（九三六）九月、藤原秀郷がこの野に狩りに訪れた時、琵琶の音を聞き、人を遣って探させたところ翁と婆であった。秀郷が何人かを問うと「宇賀彦、宇賀姫なり、五穀の守護としてこの所に遊べり」と答えた。秀郷は神であることを知って宮を建立し、比和野の比和大明神と称したという。文明四年（一四七二）には、時の代官が当社の大破を補修している。その後、正保慶安の頃（一六四四～五二）、また大破に及んだが、地頭の神保四郎右衛門尉政利の助成と中神・根岸・新久の三ヶ村の氏子二十四名の寄進によって万治二年（一六五九）再建。翌年二月、大和国三輪大明神を相殿に勧請し、以来、三輪大明神と改称したという。当社の社叢は、昭和五十九年十二月にふるさとの森に指定された。約四九㍻の境内の林相は、スギ・ヒノキ・シイなどで構成されており、樹齢二百年近いマテバシイやスタジイの大木も見られる。